

第41回「東書教育賞」 贈呈に当たって

代表取締役社長 渡辺 能理夫



第41回東書教育賞の各賞を受賞された先生方、誠にありがとうございます。

今回は、全国から154編のご応募をいただきました。これは、昨年の第40回の応募数とちょうど同じ数でした。ご多忙を極める学校環境にあっても、今回も全国から多数の先生方にご応募をいただいたことに対しまして、心からの敬意と御礼を申し上げます。

さて、今年は年明け早々に衆議院が解散され、総選挙が行われました。近年、選挙のたびにSNSの影響が増大しています。誤情報を含む扇情的な情報拡散が猛威を振るうこともあるようです。拡散する情報の真偽を確かめるファクトチェックの必要性が唱えられ、マスメディアなどでも取り組まれるようになってきてはいるものの、そもそも、その情報が正しいかどうかということよりも、興味が持てるかどうか、「刺さる」かどうか、ということの方が重視されて拡散し、力を得ているのではないかと考えてしまいます。ここにAIが参戦してくる訳ですが、AIも正しいかどうかよりも、広まっているかどうかの方に向かいがちなのではないかと心配になってしまいます。

折しも、中央教育審議会が次期教育課程についての議論が精力的に進められていますが、そこでも、「情報活用能力の抜本的向上」が重要な課題として議論されております。このような選挙をめぐる状況を見ても、情報に適切に接するリテラシーを育てる大事さを痛感します。必要な情

報を適切に収集し、評価・判断し、活用する、その能力をどう育てるか。いやそれ以前に、そもそも事実・真実を求める、尊重する態度をどう育てることができるのかが問われているように思えます。

中教審では、「情報」を扱う教科・領域の再編も示されておりますが、同時にこれは単に新教科にとどまる課題ではなく、幼児教育から高校までを見通して、各教科・全教育課程を通じて取り組むべき課題であることも示されております。こうした課題についても、今後ますます先生方のご研究が進むことを期待するとともに、当社も、教科書発行者として何ができるのか、改めて懸命に考えていきたいと思っております。

他にも、中教審の論点整理では、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方として、①「主体的・対話的で深い学び」の実装、②多様性の包摂、③実現可能性の確保、という3つの方向性が示されています。この点から申しますと、今回受賞された先生方の論文は、「探究学習」「協働」「学びの多様化」「特別支援」といったキーワードを課題とした、実践に基づく研究報告であり、まさに今、中教審で議論されている「深い学び」「多様性」「実現可能性」といった方向と一致したものであると思います。このように、時代とともに提起される課題に、全国の先生方が積極的に取り組み、その中で明らかになった成果や課題をおまとめになって、こうして東書教育

賞にご応募いただいているのだと思いますと、この賞を続けていることには意味があり、また大変ありがたいことだと、改めて強く感じます。

最後になりましたが、ご多用の折に、最終審査をご担当いただきました審査委員の先生方、一次審査をご担当いただきました東京教育研究

所主任研究員の先生方はじめ、ご協力をいただきました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。

皆さま方の今後ますますのご活躍とご多幸を心よりお祈り申し上げます。